

栄光

説教・「キリスト・イエスの僕」岸牧師… 1
 特集・共に賛美しよう… 2
 転入会おめでとう！柳沢洋子姉… 6
 聖句による黙想… 6
 伝道師の書き込み… 7
 牧師の書齋から… 7
 長老のファイル… 8

『キリスト・イエスの僕』

サムエル記上2章1節～10節

ローマの信徒への手紙1章1節～7節

岸 俊彦

「夜は更け、日は近づいた」(ロ

ーマ13・12)です。パウロは

「(主の)御名を広めてすべての異

邦人を信仰による従順へと導くた

めに、恵みを受けて使徒とされま

した」(1・5)。その使命を果た

さなければなりません。主がパウ

ロを捕らえてくださいました。キ

リストの福音を伝えるために、節

制し、苦難に耐え、全力を尽くし

てギリシャ世界をパウロは走り抜

きました。主のお蔭でパウロに

は全てが可能です(フィリピ4

・13)。「今や、義の冠が私を待つ

ているばかりです。かの日には、

正しい審判者である主が、それを

私に授けてくださるでしょう」(2

テモテ4・8)。

その使命を果たすためにはロー

マのキリスト者の協力がぜひとも

必要です。第3回目の伝道旅行の

最後、エルサレム訪問を前に、56

年冬から翌春のコリント滞在中に

この手紙は口述筆記されました。

ローマ社会は多神教の世界でし

た。そこから一神教へと回心した

異邦人キリスト者と元々一神教を

信じてきたユダヤ人キリスト者

が、異教社会の中で改めて何を信

じ、どう生きるべきなのか。どう

信仰を貫くことができるのか。そ

してローマに、キリストの体なる

まことの教会をどう立てるのか。

この課題に取り組むことは、パウ

ロにとって最重要の課題でした。

人生は思いがけないことの連続

です。しかし、そこにも神の定め

があります。目を覚まして祈りつ

つ見えないものに目を注ぐので

す。聞こえないものを敢えて聞こ

うとするのです。神の備えを信じ

るのです(詩121・2)。

教会が時代の転換点に立つ時、

ロマ書が取り上げられます。ロマ

書が証しする神の福音が教会の改

革を推し進めるからです。教会の

改革ばかりでなく、この世界の転

換を神の言葉が促すのです。16世

紀、私たちの属するプロテスタン

ト教会を生み出した宗教改革は、

ロマ書の示す神の言葉によって進

められました。

コロナ禍の困難の中で、混沌と

した世の中は一層混乱し、教会の

現実には教勢面でも財政面でも明ら

かに衰退しています。私たちの人

生、私たちの教会は、どのように

この事態に耐え、乗りこえてゆく

ことができるのでしょうか。

主がパウロを呼び出されました。

同じように主が私たちを選び、

求め、呼び出し、神の福音、神の

言葉の前に立たせてくださっています。

罪と死からの解放を告げる

福音、神の言葉こそが神にかたど

って造られた人間として私たちを

立ち直らせ、新たに生かします。

神の定めは、私たちからはまこ

とにはかりがたい。神と私たちの

間には永遠の質的差異がありま

す。私たちに對する神の超越です。

実は、神の超越とは私たちの側か

らの視点だけで考えることではあ

りません。神の側からの視点があ

ります。神の視点を明らかにする

のが、神の福音、神の言葉です。

神の言葉に私たちが立つことを、

私たちは許されています。神の言

葉が私たちに告げることは、神と

私たちの間にある永遠の質的差異

を主が超越して、まことの人とな

ってくださったことです。

「わたしたちが神を愛したのでは

なく、神がわたしたちを愛して、

わたしたちの罪を償ういけにえと

して、御子をお遣わしになりました

た。ここに愛があります」(1ヨ

ハネ4・10)。主イエス・キリス

トの出来事にこそ、まことの神の

超越があります。私たちの人生を

切り開き、世の混乱に耐え、乗り

越えるためには、キリストを知り、

信じることです。キリストの恵み

に動かされて、キリストの僕とな

ることです。キリストの御名によ

って祈ることです。これこそ永遠

の命に通じる救いに至る狭い門か

ら入ることです。



コロナ禍のため
大勢で讃美歌を歌う機会が
減っています。
讃美歌は、神を讃え、
歌う私たちを励まし、
そして、力を与えてくれます。
いま、あなたが歌いたい讃美歌は
何番でしょうか。

共に賛美しよう

約束の聖歌

大西律子

2015年の9月末、恵泉女学園中学の同窓会が40年ぶりに開催されました。たくさんの同級生と、今でも元気はつらつな6名の先生方と共に、本当に楽しい1日でした。そしてその数ヶ月後、お一人の先生が突然この世を去りました。くも膜下出血でした。出席されていた先生方の中でも、一番お元気な先生でした。

同窓会幹事だった私は、信じられない思いで葬儀に参列しました。何曲か讃美歌を歌い、先生の晩年のご様子を伺い、少し心も落ち着いてきた時、最後に歌った讃美歌が讃美歌21、575番「球根の中には」でした。幾度となくこの讃美歌を耳にしてきましたが、この時ほど心が揺さぶられたことはありませんでした。歌詞の一つひとつが心に響いて涙が溢れ、最後まで歌うことができませんでした。球根の中に秘められている花のように、

寒い冬の中も耐えて待っている春のように、必ずそこには希望があるということ。すべてのことには時があり「その日その時をただ神が知る」という約束のメッセージでした。神様にすべてを委ね、神様の深い愛の中で生かされていることを強く感じることができるとの讃美歌が、私は大好きです。

私が20代前半の頃、CAFというグループがありました。これはクリスマスチャンアーティストフェロシップの略で、芸能界や音楽業界で活躍しているクリスチャンの人たち30名ほどのグループでした。ゴスペルシンガーソングライターの小坂忠さん、岩渕まことさんを中心に、久保田早紀さんこと久米小百合さんご夫妻、アコーディオン奏者のcobasさん、資生堂のCM「君の瞳は10000ボルト」のモデルさんなど、ここには書き切れない錚々たるメンバーでした。ある方のお誘いで、恐縮ながら私もお仲間に入れていただき、そこでたくさんのゴスペルソングと出会い、賛美することの素晴らしさを教えていただきました。忘れられない貴重な体験でした。

神様がともにいてくれます

持田祐介

私は大学時代に合唱をやっていました。部活動で2つある合唱団の1つに所属していました。

大学がキリスト教系列の学校だったため、合唱団では決まって歌う讃美歌がありました。1つが讃美歌542番に沿って歌う「日々の糧を」で、合宿の食前に必ず歌っていました。もう1つが定期演奏会に歌う讃美歌405番「神とともにいまして」でした。

定期演奏会は、合唱曲を歌うパートが3部か4部で構成され、最後に歌うのが「神とともにいまして」です。1番と2番を歌った後、ハミングで団員がメロディーを歌っている中で団の部長が挨拶をして閉幕するというのが定番でした。

そのような思いのある曲なので、歌いたい讃美歌と聞いて一番に思いついたのが、この讃美歌でした。

改めて歌詞を読むと、「神とも

にいまして ゆく道をまもり、あめの御糧もて ちからをあたえませ」と、旅立つ人の行く末に神様がともにいらっしやってお守りくださるように祈る内容となっています。

後半の歌詞には「また会う日まで、また会う日まで、神のまもり 汝が身を離れざれ」と、再会の時まで神様のお守りがともにあるように祈る言葉があります。このコロナ禍で会えない人に思いをはせ、健やかに過ごしていることを願う、そんな今の状況に合った讃美歌だと思えます。

私は7月に第3子の息子を授かりました。かけがえのない存在を授けてくれた神様に感謝するとともに、讃美歌の歌詞のように、この子の人生という旅路に神様がともにいてくれますように祈りたいと思います。また、コロナ禍が始まって以降、礼拝に行くこともできず、友人とも会えない日々が続いています。この讃美歌の歌詞のように、会えない人のことを思っ

讃美歌は合唱

遠藤路得子

讃美歌は大勢で合わせて唱うことが、一番良いと思う。

現在は、聖歌隊としての活動が、1年以上出来ないことが、非常に残念だ。しかしそれは当然のこと。当教会ではそれでも、一度も休むことなく礼拝を行ってくださっていることに、本当に感謝している。

私が大きい声で唱えるのは、子どもの頃、何かあると体いっぱいに大声で泣いていたためだ。小学校が嫌で泣いて逃げ出し、母に追いかけられ、結局は無理矢理連れて行かされる。疎開先の学校も嫌で毎朝泣きながら行っていた。一緒に疎開していた姉が、泣声が畑の向こうからも聞えていたよ、と言っていた。小柄なせいかな、思い通りにならないと大声で泣いていた。そのおかげか大きな声が出るようになったのだと思っ

小学校が集って合唱祭が催され、2部合唱の下のパートで唱った。声が大きいので、先生に人の声を聞いて唱うことを教えられた。

その頃、父（牧師）に発声指導をして貰った。大声は歌の時だけでなく喋る時でも、高校時代も学校の廊下を先生の悪口を大声で喋っていて、その先生に頭をコツンとされたことを覚えている。

近年、聖歌隊でアルトからソプラノになった。練習の時、最近は大声で間違ったりするので迷惑をかけている。ソプラノはほぼメロデーなので他のパートを聞いて唱うことが出来る。合わせて唱う讃美歌は特にそうでなくてはならない。メロデーもだが、言葉が時に心を打ち、涙し、うなずき、反省しながら唱うこともある。どれが好きかはその時々なので言えない。以前、当時指揮者だった中西洋さんに「アーメンが下手やなあ」と指摘されたことは今も覚えている。確かに合唱では難しい。何より心を合わせなければならぬ。

礼拝の時、私は一人心の中でアーメンを付けている。練習が再開されることを祈っている。

共にいてくださる主

有賀彰子

このたび「共に賛美しよう」というテーマをいただいた時に私の頭に浮かんだ忘れられない体験を書かせていただきたいと思いません。それは、問安委員をさせていただきますました時、いつも委員長が問安されていらした姉妹を私も一緒にお訪ねした時の体験です。

その姉妹はご高齢で特別養護老人ホームに長く入居されていらした方でした。姉妹は、委員長がベツドの横で色々と話し、語りかける言葉を寝たままの状態でおられました。私たちが帰る時にお別れに讃美歌を歌いました。その時、最後のアーメンを歌いました時に、一緒に「アーメン」と歌われて共に主を賛美される姉妹がいらつしゃいました。ずっと一言も言葉を口にされなかった姉妹が口にされた唯一の言葉が「アーメン」でした。その時私は、主が私たちをとらえ、信仰を与え、

同じ教会に招き、そして礼拝の恵みに与かり、今ここで共に賛美する時を供えてくださった主に感謝でいっぱいでした。この体験はずっと残り続け、今も礼拝で讃美歌を歌う時、私はこの姉妹の「アーメン」と共に、心の中で「アーメン」を歌っています。

今のコロナ禍にある医療の逼迫、経済的な困窮、通常の日常生活や学校生活を送ることが出来なくなっている等々の状況は、私の小学生時代の第二次世界大戦中・戦後にあつた体験、大空襲により焼け野原になって住居を失つたり、被災しても十分な医療を受けられずに家族の命を失つたり、普通に教育を受けられなかったり、食材を求めて買い出しに行つたり、深夜に食材の入荷の情報が入るとそれを求めて行列に並んだことなどと重なります。

コロナ禍にあつて「いま、あなたが歌いたい讃美歌は何番でしようか」という問いかけをいただき、私が共に賛美したい讃美歌は、讃美歌85番、273番A、302番、讃美歌II 80番を選ばせていただきたいと思ひます。

今、脳裏に浮かぶ讃美歌

岡本直美

コロナ禍においても毎週礼拝がさざげられていることに感謝いたします。

今この時、歌いたい讃美歌といわれましても、信仰生活の浅い私にはなかなか思いつかず、頭の中に流れてくるメロディーは中学、高校時代に毎朝の礼拝で歌われた曲ばかりです。そのメロディーも1曲を通してではなく、自分の好きなフレーズで、その曲の出だしの言葉がわからないことには、何番なのか？と、中学入學時に買つてもらつた讃美歌をパラパラ、悪戦苦闘しました。

まず、7番「主のみいつとみさかえとを」。礼拝でよく歌われました。

次に285番「主よ、み手もてひかせたまえ」、298番「やすかれ、わがこころよ」、302番「み神の風をば 帆にはらみて」。感染者が日毎に増え、今まで以上に何をし

たら良いのか不安の中にある時、心を落ちつかせることが出来るように感じます。

そして338番「主よ、おわりまで仕えまつらん」。当時は何も考えず、ただ文字を目で追つて歌っていました。今、改めて歌う時、洗礼を受けた頃の初心はどこに行つてしまったのだろうか、恥ずかしくなります。

それでもまだ沈みがちな心を奮立たせるのが、379番「見よや、十字架の旗たかし」、380番「たてよ、いざたて 主のつわもの」。とても元気づけられ勇気がわいてきます。

そして、最近礼拝の最後によく歌われる、II編164番「勝利をのぞみ、いさみて進まん」。学生時代、集会などでよく歌われた曲です。まさかこれが讃美歌になっているとはビックリ！しばし懐かしい思い出がよみがえつてきます。顔をあげ、正面にかかげられている十字架を見つめ、言葉を一つ一つ噛みしめながら、その日礼拝堂に集められた皆様と共に賛美できる喜びに包まれ感謝で一杯になります。

共に歌える日まで

持田滋子

新型コロナウイルスの流行で私たちの生活は一変しました。今までも、交通事故、病气、災害と私たちはいつだって予期せぬ出来事に襲われる可能性はあったのですが、今日と同じ明日が来るという保証はないということを改めて突き付けられた思いです。あらゆる世代で大切な機会が失われしました。特に若い人たちが失った一生に一度の修学旅行、目標にしていた様々な大会、望んでいた就職先などを思うと心が痛みます。

いろいろな機会が失われ、制限の多い日常ではありますが、後戻りできない大切な今の時を、与えられた恵みに感謝して大事に過ごしたいと思うこの頃です。

有難いことに、コロナ禍にあっても私たちの教会では変わることもなく礼拝が守られ、ライブ配信も行われています。牧師、伝道師、長老の皆様のご努力に心から感謝

申し上げます。

礼拝の中で讃美歌を歌うことも許されています。他の教会ではオルガン演奏のみだったり、決められた少数人数のみが歌うことにしたりということもあるとか。歌うという行為は大きな飛沫を飛ばすため、今の状況では歌うこと自体が難しくなっています。しかしながら讃美歌は私たちの信仰告白であり、信仰の歩みを励まし勇気づけてくれるものです。困難な今だからこそ歌いたいのです。

讃美歌を選ぼうとすると、好きな歌が多すぎて、いつもあれこれ迷ってしまいます。でも結局は思い出に繋がる曲が残ります。今選ぶなら405番でしょうか。亡くなった母に教わって教会に連なる前から好きな歌でした。母はクリスチャンではありませんでしたが、この歌を聞くと教会に行く道筋をつけてくれた母を思い出します。コロナ禍にあつてなかなか会えなくなつた教友を思い「また会う日までかみのまもり汝が身を離れざれ」と歌いたいとおもいます。顔を合わせ、声を合わせて共に賛美できる日を待ち望みつづ。

音楽のちから

高橋恵樹

両親がキリスト者だったので、音楽はいつもそばにあった。幼稚園の時、先生がオルガンを弾いている手の動きから、自由に奏でているのを不思議に思い、興味を持ったのでオルガン教室に入れてもらった。その後、小学生の間はピアノを習ったが、センスがなくて上達しなかつたので、その後は趣味で弾いていた。

小学校のコーラス部で男子は私だけだったが、ボーイソプラノでハーモニの基礎を学んだ。その後、変声期が来て歌わなくなつたが、クラシックからポップスまでジャンルに縛られず、分け隔てなく親しんできた。中学ではオーケストラ部があつたので、小学校で好きだつたりコーダーの延長でフルートを担当した。大学に入つてからは男声合唱部に所属した。

経堂北教会に通うようになって、当時、聖歌隊の山口邦彦さん

に声を掛けてもらつて今に至る。聖歌隊の方々には、なにかとおだてていただいております、積極的に話しかけてもらっているのも、とてもありがたい、いつも楽しく練習してきました。

讃美歌の旋律は歌い易く、美しい和声で構成され、聖書の内容や祈りが表現されている。以前バッハの『教会カンタータ』などの合唱曲をいくつかオーケストラの伴奏で歌つたことがある。コーラスのそれぞれのパートがメロディアスに書かれていて、全体としてハーモニが響きあうように描かれている。とくに、『クリスマス・オラトリオ』は華やかで、逆に『短調ミサ曲』や受難曲は重々しい。「心に太陽を。唇に歌を持って」。これはドイツの詩人ツェーザル・フライシユレンの言葉で私の座右の銘だ。私は音楽のちからを信じている。沢山の人と一緒に声を出して、ともに歌うことを通して、平和を実現できたらと思う。聖歌隊でも持ちつ持たれつ、頼りあつて賛美できるのを楽しんでいきたい。

転入会おめでとう！

転入会にあたって

柳沢洋子

この度、経堂北教会に加えていただき感謝いたします。召天者記念礼拝に出席した時に歴代の教会員の写真が壁一面に飾られていたのに感動しました。自分もここに加わりたい、と思いました。母方がずっとクリスチャンでしたので、始めから神様はいて当然、という環境で育つたことは恵みでしたが、一方で教会や友人が語る証のような、劇的な神様との出会い、とか神様の語りかけが聞こえた、という経験は無く、本当に信じているのか、と思う時もありました。祈りや平安に満ちた日々でもなく、漠然と教会に通っていたように思います。

目的も無く怠惰な学校生活の終盤に、恩師となる兵藤豪希先生と出会い、「オルガン音楽は信仰告白である」と教えられ、その事はその後の人生に多大なる祝福を与えてくれました。今になって、神様はあのような方法で私を救ってくださったのだ、と確信しています。結婚や転居で教会が変わったりする中で、教会に足が向かなくなり、放蕩息子のように過ごしたり、「クリスチャンの癖に」という自分だけの正義をかざし、人を裁き傷つけてきたように思います。でも神様は決して見放さず、太っ腹な愛で許し続けてくださいました。

「まず自分の目から丸太を取り除け」(マタイ7・5)の御言葉を握りしめて、「なすべきことはただ一つ、目標を目指してひたすら走る」(フィリピ3・13~14)人生、そして召される時に「取るに足りない僕です。なすべき事をしたに過ぎません」(ルカ17・10)と祈れる人生を送りたいと願っています。どうぞ宜しくお交わりくださいますよう、お願いいたします。

聖句による黙想

マルコによる福音書

9章42節~50節

「互いに平和に過ごしなさい」と主イエスは私たちに仰いました。特別な願いではないと思います。私たちは皆平和に過ごしたいと願うものでしょう。しかし誰もがそのように平和を願っているはずであるのに、私たちはこの誰もが望んでいるはずの平和を手にすることができていません。時に他人に怒りやいらだちを覚えながらやっていくしかない毎日です。主イエスがそのような私たちに平和を願い、平和へと招いているということは、何よりの慰めです。

しかし悲しいことですが、人間はこの招きに応えられる強さを持っていません。最初に主イエスによって平和を願われた弟子たちもそうでした。弟子たちはこのとき、自分たちの中で誰が一番弟子なのかを論じていたと言われていました。そういう無益な争いをやめて、平和に生きるようにと主イエスは語りましたが、弟子たちはそれに従うことができませんでした。主イエスが平和を願うにもかかわらず、その後も弟子たちは自分が一番弟子となることを求めて、抜けて駆けたり、互いに足を引っ張り合うような、情けない姿をさらすことになりました。そして教会も、キリスト者も、この弟子たちを愚か者と笑うことができないものではないかと思えます。教会の中にも確かに平和のない争いがあるからです。教会と教会の間で、信徒と牧師の間で、信徒同士、牧師同士の間で、憎み争い続ける弱さが私たちにあります。

それでも私たちは、この教会にこそ、キリストの望んだ平和があることを信じます。復活の先にある神の国にその平和があります。そしてその神の国の喜びを祝うこの礼拝にこそ平和があります。神の国を味わう聖餐の中に平和があります。平和を望む神との交わりの中に、私たちの平和があります。私たちが互いを憎むとしても、心も体も互いに離れたものであるとしても、共に同じ神を見上げるとき、共に同じ神からパンと杯をいただくとき、そこに一致があり平和があるのです。(狩野進之佑)

伝道師の書き込み

8月に入って、無事に(?)正教師試験のためのレポート課題の再提出が課されました。4つ提出して3つ再提出と少し厳しい結果でありました。ちょうど夏期休暇と被る8月中旬に再提出ということで、夏休みの宿題としてゆつたり進めておりました。教会と買い物以外はひたすら引きこもっていましたので、今年唯一の夏休みの思い出です。

牧師の書斎から



8月1日、礼拝を終えてから2回目のワクチン接種を受けました。1回目から3週間後の同じ会場でしたから、前回と同じく混んでいて、同じような人が来ているのかと思つたら違いました。空いているし見覚えのある人はいませんでした。2回目となると緊張せずスムーズに終わることができました。その夜副反応もなく翌日父の病院に付き添えろと思ひ一安心。

先月ワクチン接種券が届いた話をしましたが、夏期休暇の終わりに1回目の接種をすることができました。副反応で寝込んだとか、色々なところで聞いていたので身構えていたのですが、結果的には翌朝体がだるいくらいで終わってしまいました。朝にだるさがあった時は、これが噂の副反応か、と思つてそそくさと寝ていたのですが、昼にもう一度目が覚めた頃には、副反応は影も形もなくなっていたのでした。しんどくないに越したことはないのですが、若いか

翌日夫婦で実家に父を迎えに行きそれから病院へ。自宅に戻り、また午後病院へと、結局一日がかりとなりました。94歳の父は正直言つてわがまま、頭が固い。医師や看護師の話、こちらの話が聞こえているのか聞こえていないのか。理解しているのか理解していないのか。そのまま入院しました。その夜、疲れもあつて多分副反応で熱が出ました。38度まではいきませんでした。翌日はゆつくりできたので夜には熱が下がりました。そうしたら1週間入院す

ら大変だと脅されていたのにこの程度で、なぜだか申し訳ない気持ちになりました。2回目の接種も無事決まりましたが、今度はどうなることか。

8月中は集会もなく、休暇もあるのですが、9月の試験に向けて最後のひとふんばり、と思つてはいたのですが、過ぎてから振り返りますと、2回の説教準備とレポート再提出のため、思つたより何もできていない日々でした。勉強が予想よりも、今一つ進まないまま終わってしまった。もうひと月

るはずの父を引き取るようにとの連絡がありました。その日一日なんだかんだと父から電話がありました。この大変な時に入院するほどではない、騒ぐ患者は置いておけないというのはよく分かることです。弟夫婦も同じ理解です。水曜日の午前中に実家に連れ帰りました。しかし、その後も落ち着かず、何度か病院を行ったり来たりです。8月は日曜日の礼拝以外に何もありませんでしたから助かりました。「10年後、20年後長生きするためには努力がいる」そうで

が終わるのか、と月末ごとに思うのはいつものことながら、もつと余裕のあるものだと思つていた今月はいつにも増してそんな印象があります。

9月はついに正教師試験本番といつても今年度はコロナ禍のために試験はレポートに代えられ、面接もオンラインとなりました。例年であれば大阪まで行かなければならなかったのですから、この点は楽になつてありがたいことです。なんとか良い報告ができると思います。(狩野進之佑)

す。周りの迷惑を顧みることはできないのでしょうか。

その合間に食べたバナナが酸味とコクがあり、とても美味しいものでした。沖繩にいるCSの保護者が生産したバナナです。自然に熟して日曜日食べ頃になるようにと送ってくださいました。新聞紙に包まれたバナナは房がバラバラになり、皮もやや黒くなつていましたが、皮をむいたら実に立派。冷やして食べて、熟したバナナの本当の味を知りました。

個人消息



長老のファイル

8月8日の夜、実家で母と夫の3人でオリンピックの閉会式を見ていたら一件のLINEが届きました。神戸に住んでいる従兄弟から、母の姉が亡くなったことを知らせる内容でした。目の前のテレビで映し出されている、手を振ったり、笑顔で肩を組んで歩いている選手たちと、「亡くなった」というLINEの文章にとっても大きなギャップを感じ、一瞬どうし

たらいいのか分からず、しばらく携帯を握ったままでした。そして「次はバリなのね」、という母が発した明るい声を聞き、寝る前のこの時間に母には伝えない方がいいと判断し、この日は帰りました。

母には翌日から伝えてもらい、私たち夫婦が奈良・生駒市の伯母のマンションで行われる家族葬に出席することにしました。このコロナ禍での移動は心配もありましたが、2人とも2回のワクチン接種を終えていたのと、母の代わりには何とか出席して思いを届け

てあげたい、という気持ちから日帰りを決行しました。

葬儀は伯母が通っていた扇町教会の山田真理牧師が執り行つてくださいました。牧師先生を入れて9人だけの小さな葬儀でしたが、伯父も少しの時間だけ施設からの外出が許され、伯母と最後のお別れをすることが出来ました。

葬儀で読まれたのは、伯母の愛誦聖句のコヘレトの言葉3章11節で、2日前の司式で私が読んだばかりの箇所、準備のために何度も声に出して読んでいまし

た。今回はこの箇所を牧師先生に読んでいただき、静かに聴く時が与えられました。「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある…」。伯母の96年の生涯と重ねて語ってくださったその聖書箇所は、家族の者一人ひとりにとっても大きな慰めとなりました。

コロナ禍の大きな不安と苦しみの中にある私たちですが、皆さんと祈りを合わせ「収束する時」を待ち望みたいと思います。

(沢田寛子)

掲示板



- 教会バザー
新型コロナウイルス感染拡大のため中止します。

編集後記



▽パラリンピックは知らない競技が多く、夢中でテレビ観戦しています。「失ったものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」というパラリンピックの父・グッドマン氏の言葉が、コロナ禍の今、響きます。(酒井)

「栄 光」2021年9月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp